
闘ひとは

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闘ひとは

【Nコード】

N1710L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

終戦直後。あるバーで酒を飲み続ける作家がいた。彼は何故酒を飲むのか。モデルはバー『ルパン』でネクタイとチョッキで回転椅子の上に座って飲む太宰治の写真です。

第一章

闘ひとは

終戦直後の銀座のあるバーでだった。彼は今日もいた。

その店は奥に深く幅は狭い。カウンターだけがある店だ。そしてカウンターの後ろには様々なボトルが何列も並べて置かれている。そしてカウンターの席は回転椅子だ。それが西洋風の洒落た趣きとなっている。

彼はその店で粹に見えるスラックスと白いワイシャツ、それにスラックスと合わせた色のベストにネクタイという格好だ。そこで長めの顔と高い鼻を見せていた。

「先生はいつものあれですか？」

その彼にこれまた洒落たタキシード姿のバーテンが声をかけてきた。

「ウイスキーですか？」

「うん、それを頼むよ」

かなり強い訛りであった。東北の、それも相当北の方の言葉らしい。その言葉を出しながらバーテンの言葉に対して応えたのである。

「それをね」

「はい、じゃあそれで」

これで頼むものは決まった。それでウイスキーがボトルとグラスで出された。だがグラスの中には氷はない。終戦直後で物資不足なのだ。氷にすらそれが及んでいたのだ。ウイスキーにしろ今こうして店にあるのがかなり不思議な程である。そんな時代だった。

彼はそのウイスキーを貰うとだった。すぐに自分で入れて飲みはじめた。

そうしてそのうえで。こんなことを言った。

「まずいいね」

「まずいですか」

「うん、まずいよ」

そのウイスキーを飲みながらの言葉である。

「この店はね」

「そうですか。まずいんですか」

「この店が悪いんじゃないよ」

彼はこうも言った。

「ウイスキーそのものがね」

「まずいですか」

「ウイスキーは美味しくない酒だよ」

彼にしてはそうなのである。それで実際にそのウイスキーをまずそうに飲んでいる。

「いや、お酒自体がそうだね。まずいよ」

「それじゃあ飲まない方がいいんじゃないですか？」

バーテンは彼のその言葉を聞いて怪訝な顔を向けた。とはいってもその表情は決して悪いものではない。むしろ彼を心配する顔になっていた。

そうしてその顔で。彼に言うのである。

「かえって身体に悪いですよ」

「身体に悪いのは百も承知さ」

こう応えながらだった。懷から煙草を出す。ゴールデンバットだ。そのゴールデンバットを吸いながら。彼はまた言った。

「この煙草にしろね」

「煙草もわかっていてなんですか？」

「そうだよ。酒も煙草も身体に悪いよ」

それは彼でなくても誰でもわかっていることだった。どれも非常に身体に悪い。

「けれどね。それでもね」

「飲んで吸うんですか」

「そうさ、それでもだよ」

煙草を右手に持ち笑う。笑いながらまた言う。

「僕は飲んで吸うよ。このウイスキーもね」

「ウイスキーをですか」

「息を止めてそれで一気に飲むんだ」

彼は言った。

「そうやって一気にね」

「それが飲み方ですか」

「そういうことだよ。僕は酒は楽しんで飲まないんだ」

言いながら吸い終えた煙草を黒い灰皿の上に置いてだ。そのうえで再びグラスを手に取ってその中に半分程度残っていたグラスを見るのだった。

グラスの中のウイスキーはブラウンの光を放っていた。店の証明に照らされそれでその褐色の独特の光を彼とバーテンに見せていた。

「あえて苦しんで。それで飲んでいるんだよ」

「それはまた変わった飲み方ですね」

バーテンはその言葉を聞いて首を傾げさせた。

「またどうして。そんな風に飲んでるんですか？」

「闘いだよ」

彼はそのグラスの中のウイスキーを見続けたまま言った。

「これはね。闘いなんだよ」

「闘いなんですか」

「そうだよ。闘いだよ」

それだというのだ。

第二章

「闘いなんだよ、これは」

「そうなんですか」

「そうさ、闘いなんだ」

言いながらだった。そのウイスキーを一気に飲んだ。そのまま飲み干すと胃の中に熱いものを感じた。彼にとってはそれも苦々しいものだった。

その苦い感触の中で。彼はまた言った。

「これがね」

「お酒を飲むのも闘いですか」

「酒も煙草もね。そうなんだよ」

「だから飲むんですか」

「そうだよ。今日はこれを一本空けるよ」

彼は言った。

「それでいいかな」

「ええ、私はいいですけどね」

バーテンはそれはいいとした。

そうしてだ。そのうえでこうも言うのだった。

「しかしですね」

「しかし？」

「先生も変わった人ですね」

彼に対する言葉である。

「また随分と」

「変わってるかな」

「変わってますよ」

バーテンは今度はいぶかしむ顔になっていた。その顔で彼に述べていた。

「それもかなりね」

「そうかもね。まあ自覚はあるよ」

「御自分でもですか」

「僕はここの生まれじゃない」

東京の人間ではないというのだ。ここで少しばかり自嘲が見えていた。

「青森のね。随分と北の方のね」

「その生まれですか」

「兄さんも姉さんも一杯いたよ」

このことも話した。

「大きな家だね。やたらと広い家だったよ」

「そこで過ごしておられたんですか」

「ここに出るまではね。ずっとそこにいたよ」

言いながらだった。酒を飲み続ける。実際にそのボトルを一本空ける勢いだ。

「そこにね」

「それで東京に出て、ですか」

「東京に出てもう随分と経つよ」

彼の言葉は遠くを見たものになっていた。それを見ながらまた話すのだった。

「かなりね」

「それじゃあもう東京には」

「慣れたかな。けれど」

「けれど？」

「今の時代には慣れないね」

こう言うのである。

「戦争は終わったけれど」

「ええ」

それは確かに終わった。東京も空襲で廃墟になってしまった。しかしそれでも戦争は終わった。それは紛れもない事実であった。

「あの戦争について今更ながらに言う人があるね」

「何か東大の教授とか学者さんとかが色々言ってますね」
「赤旗を持ってるね」

彼の言葉はここでは感情がなかった。

「それでマルクスとかエンゲルスとか。革命とか」

「最近急に言い出してますね」

「馬鹿馬鹿しいよ。あんなもの」

言葉が変わった。吐き捨てるものになった。

「マルクスだって！？平和勢力だって！？」

「あれは違うんですか？」

「違うよ、革命なんて全然平和じゃないよ」

彼はそれを頭から否定していた。それを今言っているのである。

「あんなものはね。平和じゃないんだよ」

「平和じゃないですか」

「そうだよ。大体だよ、あの戦争だって」

「ええ」

「皆支持していたんじゃないか」

今度言うのはこのことだった。

「そうだろ？君もそうだっただろ」

「ええ、それは」

バーテンも今の彼の言葉にはすぐに答えた。

「やっぱり」

「皆同じだったんだ」

そのウイスキーを飲みながらの言葉であつた。

第三章

「皆ね」

「そうですね。あの戦争は」

「誰だって支持していたんだ」

彼はまた言った。

「それこそ共産主義者だって共産主義を止めて戦ったんだ」

「転向してですね」

「そうさ。僕だってそうだった」

彼自身もそうだったというのである。

「誰もが支持して。それで戦場に行ったんだよ」

「戦場に行かなくても」

「日本でも皆それぞれ頑張ったんだ」

そうしていたと。静かであるが強い言葉で述べたのだ。

「皆がね」

「先生みたいな作家さん達もですね」

「学者さんも」

「ですよ。皆同じで」

「皆が皆そうしてあの戦争を支持して」

「それぞれ戦ったんだ」

このことを確かに言うのだった。

「それで何だい、今は」

「今ですか」

「そうだよ。急にあの戦争は間違いだった、あの戦争には反対していた」

彼は言っていく。その事実を。

「事実を捻じ曲げることはできないんだよ。皆が皆ね」

「ええ、そうですね」

「卑怯なんだよ。負けたのが何だっていうんだ」

彼が次に言う事実はこれだった。

「僕は今でも言えるよ。天皇万歳だよ」

「陛下にですか」

「正直に言えるよ。陛下は大切だよ」

「そうですね。陛下は」

「そうなんだよ。革命！？あんなものはただ殺し合うだけだよ」

それだけだというのだ。革命というものはだ。

「そんなものは何にもならないんだよ」

「何にもですか」

「あれは嘘だよ。まやかしだよ」

彼はまた言った。ウイスキーを次々と飲みながら。粗末な煎り豆をかじりながら。そのうえでバーテンに対して話し続けるのだった。

「あんなものはね」

「今は皆そのまやかしに乗ってるんですか」

「そしてしたり顔で言ってるんだ。あの戦争がどうか日本がどうか」

「先生はそれには」

「反対だよ。日本は親だね」

「はい」

「親が負けるとわかっていてそれに乗らない子供がいるかい？いな
いだろう」

それを言うのである。日本を親に例えて。

「負けるってわかっていてもね」

「それで後でとやかく言うのは」

「そしてしたり顔で言うのは卑怯なんだよ」

彼の声がこれまでになく忌々しげなものになった。

「偽善なんだよ」

「偽善ですか」

「そうだよ、偽善の中でも一番醜いものだよ」

言いながらそのうえでさらに忌々しい顔になる。

第四章

「僕はそんな連中が嫌いなんだよ、それで」

「そうした人達とですか」

「ああ、闘ってるんだ」

それが彼の言う闘いなのだった。その闘いだ。

「こうしてあえて飲んでそれで」

「書いてですか」

「長く生きられなくても」

彼はまた言う。

「それでもね。闘うよ」

「命ある限りですね」

「あんな連中には負けないよ」

酒を飲みながらさらに続けていく。

「絶対にね」

「わかりました。それじゃあ」

バーテンは彼の言葉をここまで聞いてだ。そのうえであるものを差し出した。それは。

「これは」

「どうぞ」

微笑んでの言葉だった。差し出したものはチョコレートだった。

この時代ではウイスキーよりも貴重なものになっている。それを差し出してきたのである。

「これを」

「くれるのかい」

「はい、食べて下さい」

微笑んでの言葉だった。

「先生が闘われるなら」

「これを食べてくれって言うのかい」

「ええ、闘って下さい」

「有り難う」

彼はそのチョコレートを受け取った。そして早速その銀紙を外して。そのうえで口の中に入れる。それから言った言葉という。

「アメリカ軍のやつだよな」

「そつから貰ってきたものです」

「ギブミーチョコレートか」

「それでもいいですよな」

「いいよ」

その英語の紙で包まれているチョコレートを食べながらの言葉である。

「アメリカ軍を食べてるからね」

「ははは、そうなりますね」

「アメリカ軍には一度だけ負けたよ。けれど」

「それでもですね」

「僕は闘うよ。その偽善者達とね」

彼の今度の敵はそれなのだった。偽善者達とである。

「どうなつてもね」

「応援してますよ」

バーテンはチョコレートを食べながらウイスキーを飲んでいく彼に告げた。

「それならね」

「はい、それじゃあ」

彼は飲みながら闘うことを誓っていた。彼の闘いである。それを決意して飲むのだった。終戦直後の一幕である。

闘ひとは 完

2
0
0
9
·
1
2
·
1
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710/>

闘ひとは

2010年10月8日15時06分発行